



②伊馬鶴平作「桐の木横町」

左より望月美恵子(優子)、
有馬是馬、轟美津子、春日芳子、
水町庸子、明日待子、森野鍛冶哉。

小粋な"ムーラン調"

そして、昭和7(1932)12月にムーランの歌手高輪芳子が新宿のアパートで青年文士とガス心中を図った事件がジャーナリズムに書き立てられ、ムーラン・ルージュの名が一躍世間に広まりました。ちょうどこの頃からムーラン独特の作風が生まれ、爆笑スターで売る他の劇団とは異なる脚本の感覚の若さ、垢抜けした演出の魅力が学生たちをひきつけるようになりました。中でも村山知義から「日本のルネ・クレール」と評された伊馬鶴平(のちの伊馬春部)は、特にドラマチックな筋筋は持たず、ごく平凡な小市民の生活をスケッチしながら、ほのかな哀愁と社会に対する諷刺を込めた「ムーラン調」といわれる新喜劇を生み出しました。このような当時のムーラン・ルージュを、キネマ旬報のグリエテ欄では次のように紹介しています。「兎に角、気のきいた劇団である。(中略)作者の感覚、俳優の演技、背景、照明総てが小粋で小味である。総て小といふ字のつく感じのものである。小といたてて決して軽々しい意味ではなく、寧ろ仏蘭西人の好んで使ふ愛称の意味を持つMon Petitのそれである。」(昭和9年12月11日「キネマ旬報」[No. 101. M. R.を觀て]石見為雄)

満員御礼「空気、めし、ムーラン!」

舞台は間口4間、奥行2間半(1間は約1.8m)しかない、定員430名の小劇場に、満員の時には立見席にぎゅうぎゅう詰め込まれて800名余も入りました。一日3回公演が休みなしに10日ごとに替わります。昼間は安い一階席に学生が満員で、いつしか大学ごとに座る席が決まってき

て、ヴァラエティーに六大学の応援歌が盛り込まれたりしました。また、入場料が半額になる午後8時以降の割引(時間には、必ずその回の最も評判のいい芝居とヴァラエティーが上演されます。それを観ようという客で8時前には武蔵野館の先までキップを買う長い行列ができました。ヴァラエティーの中の一座の名物「ムー哲」ことムーラン哲学は、大学教授に扮した人気俳優が客を学生に見立てて世相を皮肉った珍妙な講義をするというもので学生たちの支持を受けました。そして、正月には沢山の客が来るため、芝居のセリフをはしょって公演を一日8、9回に増やすので、わけのわからないまま終わることもありました。「空気、めし、ムーラン!」というムーランのキャッチフレーズには、人間にとってなくてはならないもの、という劇団の自負が伺われます。

戦争の影

ムーラン・ルージュの全盛期であった昭和8年(1933)初頭から10年(1935)頃は、社会がしだいに戦争へと追いつめられていく時代状況にあたり、若い踊り子たちのあどけないダンスと若い文芸部員の書く都会的で軽妙な諷刺喜劇は、正面から抵抗する手段を持たなかった当時のインテリたちにとってせめてもの憂さ晴らしの場として受け入れられたのです。その後もムーラン・ルージュは戦後のストリップショーの攻勢に敗れ閉鎖する昭和26年(1951)5月まで、多くの優秀な作家や俳優などを世に送り出しながら、戦争を背景にした時代の中で人々に娯楽を提供し続けました。